

論文が 書けないと 悩んで いませんか？

第 4 回

書き上げてからの 「本当の勝負」に 勝つために

東京大学医学部附属病院呼吸器外科講師

佐藤雅昭

本連載もいよいよ最終回となりました。「論文を書く」ことに主眼をおいて解説をしてきましたが、実は「本当の勝負」は、論文をいったん書き上げてから始まるといっても過言ではありません。いったんwordの文章が論文の形式で埋まっても、そこから学術誌にアクセプトされるまでが本当に厳しい道のりです。実際、この過程で日の目を見ることなく「お蔵入り」になる論文が多くあるのです。今回は査読者への対応と、どのようにアクセプトまで持ち込むのかについて解説します。

1. 査読への対応は誠意と「Art」で

論文を提出し、修正が許されたのであれば、それはアクセプトされる大きなチャンスです(ただし、必ずアクセプトされるとは限りませんが)。このチャンスを逃さないためには、慎重に誠意をもって査読者からの質問やコメントに対応することです。これははっきり言って、「Art」です。いかに自分も査読者も納得する答えを導けるか、粘り強い作業が求められます。いくつかポイントを挙げるなら、下記ようになります。

- ①査読者のコメントを無視したり頭ごなしに否定したりせず、いったんは引き受ける
- ②必要なら論文を修正する
- ③修正ができない、あるいは必要がない場合は、その理由をロジカルに説明する
- ④その場合、妥協点(たとえばディスカッションのlimitationにコメントを追加する)を見出す努力をする。

まず、①は「We thank the reviewer for the thoughtful comment…」といった、相手をリスペクトする姿勢からはじまり、どんな無茶なお客様の要求にも“Yes”でまず答える一流のホテルマンのように、いったん引き受けることです。もちろんそれが理にかなった指摘であれば、「Following the reviewer's suggestion…」といった具合に修正すればよいのですが、いつもそうできるとは限りません。場合によっては査読者の指摘のポイントがずれていることも多々あるので、それに丁寧に対応します。実際に誤解を生んだのなら、その原因は自分の論文の書き方にあったかもしれない、という謙虚な姿勢は重要です。